施工者に幸あれ 第46回

観覧車から構造概念まで 構造家・岡田章

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■壊してみよ

活気ある，日本大学理工学部・空間構造デザイン研究室。研究室員にも不意の来客にも面倒見がよい，岡田章教授の存在が，イイ雰囲気をつくっている。強いリーダーシップで磐石の基盤を造った実力は，先生の竹中工務店での中身の濃い8年間か。東京ドーム，奈良シルクロード博など，組織でもさまざまな建物の功績の一端を担い，福岡ドームを最後に，師匠である大構造家・斎藤公男先生の元に帰った。笑い飛ばす下積み時代の苦労話も，岡田教授の構造家としてのキャパシティの礎と見えます。

これから構造をやろうという若者には，「試験体を壊してみよ」と言う。構造は壊すことでわかってくることが多いからだ。言い換えれば，研究室のモットーである「よく遊ぶ」にも通じる。教授自らが，構造の世界で戯れていることが，よくわかります。

■コンセプチャルなもの

初めての本誌執筆依頼のときから，内容を決めずに雑談をしているうちに，テーマが決まってきた。覇志堂と先生は，たまたま学部違いの同期で，経験や思考に近いものがあるという。「周りをぐるぐる話しているうちに，興味の範囲を絞っているようだ」と，20年来岡田教授を見てきた覇志堂がいう。

フォルムと構造システム（本誌No.709）では力学をA・B二人による仮想的討論の形で解いている一文が面白い。「原稿をチェックするコワイ人がいて……」とは夫人のこと。妻が意匠設計，夫が構造設計をしたご自邸は，どちらがどちらを支えているのか，きっと見事なバランスの建物なことでしょう。

「最近はコンセプチャルな仕事が多い」と取り出した，三角錐の頂点を下にして積み上げた模型。まわりのテンション材が支えてゆらゆらしている。これが，デザイナーに刺激を与えるのか……。構造ありきで発想して，建築物になっていくとは構造家冥利。意匠設計者の根底にある思想が同じだとやりやすい。構造には，計画，歴史，コストコントロール，それになんといっても，哲学が必要だ。狭く深くではなく，範囲は広く研究していく。“積み上げ型の研究者”と自己分析される。が，構造に対する直感にも確固たる自信があると，その目が語る。

■アイディアの宝庫

理科教育ニュース（少年写真新聞社刊）の大きなカラーポスター状のものが研究室に掲げられている。No.951の「折板構造」を担当しているのが，岡田先生。子供向けだけれど，大人も引き込まれる内容なのです。このコラムのイラストレーターTacoも，実際に薄い紙を折ってつくってみて描いた。こんな素敵で本格的な本を，わずか10日前に依頼を受けて遂行されたというから驚く。実は，竹中工務店の面接を受けよと，斎藤先生から言い渡されたのが前日だったという。何事にも即応力のある方のようです。そのうえ，常々，先生の頭の中は，アイディアがいっぱい詰まっているから，依頼があれば，すぐさまそれを豪快に解放する。惜しむことはないのです，次々に湧いて来るのだから……。

岡田先生ならばと，いろいろな業界からリクエストがくる。遊戯施設の観覧車やジェットコースターの設計もその一つ。軽くて美しいこの究極の構造体がお好きだ。ウキウキとあっという間に設計してしまう姿が目に浮かびますね。徳島で，東京五輪や大阪万博に刺激を受け，「モノを造りたい」と道を決めた岡田章先生。「どんな形も解析するが，人のことを考えていない設計には納得できない」。日大フェニックス時代からの哲学は今も健在です。